

インダス文明遺跡発掘史序説

ーインダス文明遺跡発掘報告書総覧刊行をめざしてー

長田 俊樹

総合地球環境学研究所

1 はじめに

筆者は中洋言語・考古・民俗叢書 1 として、『インダス文明研究の回顧と展望及び文献目録』と題する本を 2005 年 2 月に出版した。そのなかで、インダス文明に関しては、年代といったごく基本的な問題についてさえ、なかなかコンセンサスがえられていない点を指摘した。また、解釈にいたってはまったく想像の域をでないものが事実として語られていること、とくに、アーリヤ人侵入説などはすでに過去のものとなっているにもかかわらず、一般書には現在も堂々とこの説が掲載されていることをのべた。残念ながら、これがインダス文明研究をとりまく現状なのである。では、こうした事態を打開するためにはどうすればいいのか。それが小論の出発点である。

われわれのプロジェクトでは、インドのグジャラート州カッチ県カーンメール遺跡において、グジャラート州考古局とラージャスターン州ウダイプルにあるラージャスターン・ヴィディヤピート大学考古学科と共同で発掘を行っている。また、ハリヤーナー州ファルマナーにおいても、マハーラーシュトラ州ブネーにあるデカン大学考古学科と共同で発掘を行っている。じつは、これらの発掘は日本隊が関わるはじめてのインダス文明遺跡である。これは強調しても強調しすぎることはない事実である。そればかりではなく、外国人がインド人と隊を組んで関わる発掘としても、3 例目だという。過去 2 例はいずれもペンシルヴァニア大学のポセールがおこなったロージディ遺跡とオーリヨー・ティムボー遺跡である。

一方、われわれはパキスタンにおいても、パンジャーブ大学との共同でチョーリスターン地方のガンウェリワーラー遺跡発掘をめざして交渉中である。パキスタンではアメリカ隊主体のハラッパー考古学調査プロジェクト（HARP）をはじめ、パキスタン人以外が主導する発掘が数多くおこなわれてきた。そういう外国隊に日本人が参加して発掘することはあったが、もし今回発掘が実現すると、日本隊によるはじめてのインダス文明遺跡の発掘になる。しかも、チョーリスターン地方は過去にスタインによる踏査やムガルによる現地調査によって、インダス文明遺跡が多数存在することはあきらかになっているが、実際の発掘は今回がはじめてである。

なぜ、こうした「はじめて」づくしとなるのか。答えは簡単である。それはこれまでインダス文明遺跡の発掘があんまりおこなわれてこなかったからである。また、日本隊ということでは、かつて京都大学を中心に IAPA（Iran, Afghanistan, Pakistan Archaeological Research）と呼ばれる考古調査隊が活動していた。IAPA 関係者から聞くと、インダス文明関連の遺跡の発掘も手がける予定だったが、ガンダーラなど、仏教遺跡への関心がつよく、結局インダス文明関連遺跡を発掘することはなかったのだそうだ。もし IAPA がインダス文明関連遺跡

の発掘を行っていたとしたら、いまの状況は変わっていたかもしれない。しかし、発掘は行われなかった結果として、その後も日本ではあまりインダス文明に関心をもつ研究者が出てこなかった。そして今日に至っている。

ところで、インダス文明遺跡は約 1500 あるといわれる。インドに 900 遺跡、パキスタンに 600 遺跡というのがだいたいの数である。そのうち、発掘されたものはいくつあるのか。われわれのプロジェクトのコアメンバーであり、カーンメール遺跡の発掘を現地で指揮している J.S. カラクワールに聞いてみたところ、ある程度有名なもので、ちゃんと報告書があるものは 40 ほどだという。その数は総数からみればわずか 3% に満たない。そのカラクワールの言葉を聞いたとき、愕然としたことをおぼえている。発掘された遺跡にもう一度立ち返ろう。それが小論のねらいである。ただし、発掘の実数は小論で詳しく論じるが、40 ではなく、もっと多い。したがって、発掘されたすべての報告書を取りあげるとなると、少ないとはけっしていけない。しかし、プロジェクトが終わるまでには、すべての遺跡発掘調査報告書が総覧できることをめざしている。

小論は、インダス文明関連遺跡報告書にかかれたことを日本語によってまとめ、インダス文明遺跡発掘報告書総覧として刊行することの重要性を訴えるために執筆している。こうした総覧がなぜ必要なのか。それをこれからみていこう。

2 問題の所在

解釈の横行

すでにうえでのべたように、これまでのインダス文明にかんする書籍には主観的な解釈が横行している。たとえば、リヴァースはハラッパーとモヘンジョ＝ダロの二大首都論を展開しているが、600km も離れた 2 つを安易に首都と呼ぶのはいかなものか。その後ドーラヴィーラーなど大きな遺跡が見つかり、いまとなつては、二大首都論は完全に過去のものとなってしまう。また、ウィーラーが展開したアーリヤ人侵入説は大変有名で、いまだにこの説を信じている人がいる。しかし、前著で詳論したように、いまでは完全に否定されている。こうした主観的解釈の伝統はいまでも受け継がれているようで、ポセールの最新刊 (Possehl 2002) でもインダス・ニヒリズムといった抽象的なアイデアが披露されている。それがどれだけ有効なものなのか、筆者にはよくわからなかった。出版されたデータをまとめようとするポセールの姿勢を評価していただけない、このインダス・ニヒリズムには疑問をもたざるを得ない。これも解釈の提示が求められている学問状況、とりわけアメリカに顕著なようだが、そこに問題があるのかもしれない。

発掘された遺跡数の僅少

これまでに実際に発掘された遺跡数は 100 ほどである。先のカラクワールの指摘よりもはるかに多いが、1500 ケ所という遺跡数に比べると、1 割にも満たない。では、なぜ少ないのか。パキスタンでは海外の発掘隊が活躍してきたが、海外隊による発掘には資金面においても限界がある。パキスタン考古学者による発掘が重要だが、残念ながら、パキスタン考古学者主導による発掘はあまり行われてこなかった。したがって、パキスタンでの発掘数はそれほど多くは

ない。

一方、インドではどうだろうか。インドではパキスタンとはまったく逆で海外隊の発掘参加を拒んできた。というのも、インダス遺跡の発掘はインド考古局（Archaeological Survey of India = ASI）が長く独占してきたという事実がある。海外隊による発掘が許可されなかっただけではない。インド考古局以外の、インド国内の大学にある考古学科主導による発掘についてすら、発掘許可を出さなかったと聞く。デカン大学の考古学科長だったサンカリアが1960年代にカーリーバンガン遺跡の発掘許可を申請した際も、認められなかったのだそうだ。

発掘情報開示

前節でのべたように、インドではインド考古局が発掘権を独占してきた。問題は独占それ自体よりも、発掘後報告書がなかなか出版されなかったということである。たとえば、カーリーバンガン遺跡は1960年から9シーズンにわたって発掘されたが、最終報告書の第1巻がようやく出版されたのは2003年になってからのことである。執筆者の一人である元インド考古局総局長のJ.P. ジョーシーによると、この報告書は全部で3巻本になる予定だそうだ。ジョーシーは今年なくなったので、最後まで出版されるのかどうか、気がかりである。このカーリーバンガンの発掘はジョーシーの前任者であるB.B. ラールが指揮をしたことで知られる。ラールはウィーラーの弟子であり、独立以前のインド考古局時代から活躍して、インド考古局の総局長まで上りつめたのだが、現役時代は報告書を出すことよりも、発掘を優先させてきた。この結果、インド考古局では定年退職してから報告書の執筆をおこなうという悪しき伝統がうまれてしまった。当然のことながら、カーリーバンガン遺跡の例をみればわかるように、報告書がでるまで時間がかかる。じっさい、まだ正式な報告書がでていないケースも多い。日本でも有名になったドーラヴィーラー遺跡も報告書はまだ出ていない。発掘を担当したR.S. ビシュトはすでに定年を迎えている。バナーワリー遺跡の発掘報告書とドーラヴィーラー遺跡の発掘報告書がビシュトの手によって刊行されるはずだが、いつになるのか、まだ見通しも立っていないのが実情である。

資料記録化の重要性

多くのインダス遺跡について発掘報告書が出版されていないという問題について述べてきたが、発掘報告書が出版されれば、発掘出土品がすべてわかるわけではない。じつは、倉庫に眠ったままの資料が多くある。たとえば、発掘出土品はインドではプラーナー・キラーに保管されているのだが、そのすべての発掘出土品がデータベース化されていない。ヘルシンキ大学のA. パルポラはインダス文字のデータベース化をめざし、これまでもインダス文字データを出版してきたが、プラーナー・キラーに行くたびに、新しいインダス文字が刻まれた印章を発見するそうで、実際どれだけのインダス印章が保管されているのか、だれも把握していないのだという。

パキスタンでも同様のことがいえる。パルポラによると、ウィーラーが1946年におこなったハラッパー遺跡の発掘での出土品は、ラホール・フォートの倉庫に眠っていると、ウィーラー自身が言っていたのだという。そのことを確認すべく、ラホール・フォートに行ったときに、関係者に聞いたところ、倉庫に出土品が眠っていることは間違いのないようだ。しかし、そこに何があるのかについては、現在ラホール・フォートを管理する人々は知らないとの返事であっ

た。報告書だけではなく、こうした出土品もデジタル化し記録していくことが急務のように思われる。ただし、2008年にウィスコンシン大学のケノイヤーに確認したところ、蛇の巣となっているので、なかなか近づきたいとのことである。

遺跡発掘データの共通認識化

これまであげたことはすべてつながっている。基本的には、情報が少ないことが主観的な解釈の横行をまねいている。速やかな発掘と発掘情報の開示のためには、出土資料の記録化が重要である。そして、ここで取り上げたのはその情報をいかに共通化させるかという問題である。インダス文明研究の第一人者であり、精力的にハラッパー遺跡の発掘に取り組んでいるケノイヤーはインターネットを使って、ハラッパー遺跡やモヘンジョ＝ダロ遺跡の写真や研究成果を公開している。そのサイトは以下の通りである。

<http://www.harappa.com>

<http://www.mohenjodaro.com>

こうしたインターネットでの公開をインド考古局も積極的に取り入れて、報告書に掲載されている出土品以外のものについても、全部公開していくという姿勢が大事である。

また、もっと具体的なレベルでデータの共通化についていえば、ケノイヤーたちのグループはファイルメーカーを使って、データ管理を行っている。彼らはこの方法をハラッパー遺跡だけではなく、インドを含めたデータ管理方法として、もっと広範に導入しようとしているが、インダス全域についてのデータベースを作成するにはまだまだ時間がかかるであろう。

以上、問題の所在をあきらかにしてきた。ところが、「言うは行うより易し」である。ここにあげた問題はそう簡単に解決できるものではない。インド考古局はインド政府の一役所であり、世界共通といってもいいように、役所の壁はなかなか高く大きい。遺跡を管理する末端の役人は責任問題を恐れて、こうした情報開示には消極的だ。たとえば、2006年10月にロータル遺跡に行ったとき、写真を撮影していたら、突然写真撮影をやめるようにいわれた。前回ロータル遺跡に行ったときにはそういうことはいっさい言われなかった。しかし、今回はインド考古局の総局長名で、遺跡の撮影は許可なく行ってはならぬと言う通達が出たばかりで、役人は過度に神経質になっていたというわけである。結局、写真撮影の許可願いを申請して、次回のロータル遺跡訪問時に撮影するという事で決着した。今のインドやパキスタンの現状を考えると、情報開示までの道のりはかなり遠く険しい。

3 総覧シリーズの目的

情報開示の道はきびしい。まず、最初に整理しておかなくてはならないのは、これまでの発掘によって、なにがどこまでわかっているのか、ということである。

では、具体的にはどのような形で整理をすればいいのだろうか。総覧シリーズでは、より一次資料に近いデータを整理し、なるべく解釈をのぞいた形で提示することにある。「より一次資料に近いデータ」と述べたのは、一次資料である出土品や遺跡の遺構に直接アクセスするの

がむずかしいためである。つまり、ここでいう「より一次資料に近いデータ」とは、それぞれの遺跡の発掘報告書に記載されたデータをさす。そのデータを整理し、提示することをめざすのが本シリーズである。

これまでの研究はハラッパー遺跡とモヘンジョ＝ダロ遺跡の2つの遺跡データを中心に語られることがほとんどだった。この2つの遺跡発掘が発端となってインダス文明が語られてきた以上、2つが中心となるのはいたしかたない面もあるだろう。しかし、ウィーラーが『インダス文明（第3版）』（1968）であげたインダス文明遺跡数は約100なのに対し、いまやポセール（Possehl 2003: 63）によると、インダス文明盛期の遺跡として、1052の遺跡が報告されている。すでにのべたように、カラクワールによると、インダス文明関連遺跡としては約1500ヶ所とみてよいという。いずれにせよ、この40年近くで、その遺跡数は10倍以上になっている。現在も新しい遺跡を発見するための現地調査が毎年敢行され、しかも新遺跡が次々と発見されている。遺跡数の飛躍的なのびにくらべると、発掘数はまだまだすくない。それでも、近年では大学研究機関の活躍で、発掘数もここにきて上昇しているし、その報告書も徐々にふえつづけている。その現状をかんがみると、それぞれの発掘報告書を丁寧に読み込んで、それをデータ化していくことはインダス文明研究にとって重要である。

本シリーズでは、インダス文明概説書ではなく、発掘報告書を対象として、そのデータを整理することを目的とする。もちろん、ハラッパー遺跡やモヘンジョ＝ダロ遺跡の報告書もその対象となる。データ整理は基本的に日本語でおこなう。しかし、その抜粋は日本語だけでなく、英語でもまとめ、インターネットで公開することをめざす。とりあえず、インダス・プロジェクトの終了までには、これまで刊行されている発掘報告書に記載されたデータの整理を終えたい。今の段階では本シリーズが何巻になるのかは予測できないが、本シリーズが解釈ばかりの研究から実証的な研究へ移行する契機となってくれることを願ってやまない。

では、本シリーズ発刊の提唱をおこなう小論はなにを目的とするのか。小論は発掘報告書のもととなる発掘そのものの歴史をふりかえってみたい。長田はすでに『インダス文明研究の回顧と展望および文献目録』を2005年に出版した。そこではインダス文明研究史をあきらかにしたつもりである。今回はそこでふれなかったインダス文明関連遺跡発掘史を素描してみたい。そして、付録として、インダス文明遺跡の発掘遺跡名と発掘シーズンを一覧にして提示する予定だったが、こちらは専門とするプロジェクト研究員である上杉彰紀におまかせすることにした。これは総覧シリーズ第1巻として、出版される予定である。

4 インダス遺跡発掘史素描

インダス文明発見のニュースが駆けめぐったのは、ロンドン画報の1925年9月20日号に掲載された‘First light on a long-forgotten civilization: new discoveries of an unknown prehistoric past in India’という記事である。その記事で取り上げられたのがハラッパー遺跡とモヘンジョ＝ダロ遺跡の発掘である。ハラッパー遺跡は1921年サハニによって発掘されている。一方、モヘンジョ＝ダロ遺跡は1922年にバネルジーによって発掘されている。その2つの遺跡の発掘については、インダス文明に関わる本にはかならず記載されている。しかし、それ以後の遺跡発見発掘史となると、あまり記載されたものがない。

遺跡発見発掘史がないと聞くと、インドやパキスタンでは考古学史が発達していないように思われるかもしれないが、考古学史をあつかった研究はけっこうある。たとえば、Roy (1961)、Lal (1964)、Chakrabarti (1988, 1997, 2003)、Singh (2004)、Lahiri (2005) などのような文献が挙げられる。しかし、これらの考古学史は遺跡の発見発掘史とはかなりことなる。重要なインダス文明遺跡の発掘が学説上どのような意味があったのか、インダス文明をめぐる解釈がいかに西洋中心主義的であったのか、あるいは考古学者（たとえばマーシャル）にスポットあてて、その考古者がインダス文明にいかに関与したのか等々、そういった類の研究がほとんどである。

唯一の例外がポセールの本 (Possehl 1999, 2002) である。前者ではインダス文明関連遺跡の情報が発掘したか否かに関わらず、一覧表として掲載されているし、後者では発掘された遺跡の一覧表が載っている。発掘遺跡報告書総覧を作成にあたっては、これらポセールの研究に負うところが大きい。しかし、ポセールはあくまでも研究史の一頁として遺跡発見史を取り上げているにすぎない。また、遺跡一覧表なども若干古くなってしまっている。そこで、筆者は遺跡発見史について、ポセールとはちがったアプローチを試みる。というのも、遺跡発見発掘史を知るのに、ちょうどいい時期に出版された2つの資料があるからだ。それを利用し、独立直前と独立後20年時点でのインダス文明遺跡図を比較することから、遺跡発掘史をながめることとする。

その資料とは、まず1947年に出版されたインダス文明遺跡の分布図である。この図はウィーラーがちょうど独立直前に *Ancient India* 誌に掲載したハラッパー遺跡の発掘報告の付録として出版されたものである (McCown 1947: 129-130)。そして、もう一つはちょうど独立後20年たった頃のインダス文明遺跡分布図で、1968年出版のウィーラー著『インダス文明 (第3版)』に掲載されたものである (Wheeler 1968: 138-140)。両者を比較することで、独立直前までに知られた遺跡と1960年代後半までに知られた遺跡がわかるのである。

それではまず、1947年出版の地図と遺跡名を引用しておこう。

1. アフマドワラー遺跡 (Ahmadwālā) バハーワルプル (未発表)
2. アリー・ムラード遺跡 (Ali Murād) シンド (Majumdar 1934: 89-91)
3. アムリー遺跡 (Amri) シンド (Majumdar 1934: 24-28)
4. チャップワラー遺跡 (Chabbuwālā) バハーワルプル (未発表)
5. チャク・プールバーネ・シュヤール遺跡 (Chak Pūrbāne Syāl) サーヒーワル (Vats 1940: 475-76)
6. チャヌフ・ダロ遺跡 (Chanhu-daro) シンド (Majumdar 1934: 35-38; Mackay 1943)
7. チャライーワラー遺跡 (Charaīwālā) バハーワルプル (未発表)
8. ダーバルコート遺跡 (Dābarkot) バローチスタン (Stein 1929: 55-64)
9. ダイワラー遺跡 (Daiwālā) バハーワルプル (未発表)
10. ダンブ・ブティ遺跡 (Damb Buthi) シンド (Majumdar 1934: 114-120)
11. デラーワル遺跡 (Derāwar) バハーワルプル (未発表)
12. ダル遺跡 (Dhal) シンド (Majumdar 1934: 125-27)
13. デイジ・ジ・タークヴィ遺跡 (Deji-Ji-Takvi) シンド (Vats 1935-6: 36-7)
14. ガラクワリー遺跡 (Garakwālī) バハーワルプル (未発表)
15. ガージ・シャー遺跡 (Ghāzi Shāh) シンド (Majumdar 1934: 79-86)
16. グランディ遺跡 (Gorandi) シンド (Majumdar 1934: 88)

17. ハラッパー遺跡 (Harappā) パンジャーブ (Vats 1940)
18. ジャルハル遺跡 (Jalhar) バハーワルプル (未発表)
19. カルチャト遺跡 (Karchat) シンド (Majumdar 1934: 129-131)
20. カンプリ・タール遺跡 (Khānpurī Thār) バハーワルプル (未発表)
21. コタースル遺跡 (Kotāsūr) シンド (Vats 1935-6: 37-8)
22. コトラ・ニハング・カーン遺跡 (Kotlā Nihang Khān) パンジャーブ (Vats 1940: 476-477)
23. クドワラー遺跡 (Kudwālā) バハーワルプル (未発表)
24. ロフリ遺跡 (Lohri) シンド (Majumdar 1934: 65-67, 73-76)
25. ロフムジョ・ダロ遺跡 (Lohumjo-daro) シンド (Majumdar 1934: 48-58)
26. メーヒー遺跡 (Mehi) パンジャーブ (Stein 1931: 154-163)
27. ミタ・デヘノ遺跡 (Mitha Dehenno) シンド (未発表)
28. モヘンジョ・ダロ遺跡 (Mohenjo-daro) シンド (Marshall 1931; Mackay 1938)
29. ノクジョ・シャーディーンザイ遺跡 (Nokjo-Shāhdīnzai) パンジャーブ (Stein 1942: 152-153)
30. パンディ・ワーヒー遺跡 (Pāndī-Wāhī) シンド (Majumdar 1934: 91-95, 10-114)
31. ラングプル遺跡 (Rangpur) (Vats 1934-5: 34-38)
32. サンダナワラー遺跡 (Sandhanāwālā) バハーワルプル (Stein 1942)
33. シャージョ・コティロ遺跡 (Shāhjo Kotiro) シンド (Majumdar 1934: 137-139)
34. シクリ遺跡 (Shikhri) バハーワルプル (未発表)
35. ソトカーゲン・ドール遺跡 (Sutkāgen-dor) マクラーン (Stein 1931: 66; Stein 1937: 70-71)
36. ターノ・ブリ・カーン遺跡 (Thāno Buli Khān) シンド (Majumdar 1934: 142)
37. トレコアー・タール遺跡 (Trekoā Thār) バハーワルプル (未発表)

上記の表によると、37 遺跡があげられている。そのうち、未発表と記載された遺跡が 12 遺跡、マジュムダールのシンドの調査報告に掲載されたものが 12 遺跡、スタインが報告したものが 5 遺跡ある。マジュムダールやスタインの調査は現在の基準で言えば発掘と言うよりも、遺跡踏査、表面採集といった程度のものであろう。そう考えると、発掘された遺跡は 10 に満たないことになる。また、ここでぜひ指摘しておきたいのは、ここに掲載された遺跡はほとんどが現在のパキスタンに属しており、現在のインドにある遺跡は 22 のコートラー・ニハング・カーン遺跡と 31 のラングプル遺跡のみである。

インダス文明発見の報が大々的にロンドン画報に掲載されたにもかかわらず、ハラッパー遺跡とモヘンジョダロ遺跡の両遺跡以外は本格的に発掘されておらず、いまのインダス文明遺跡の分布から考えると極僅少の遺跡からインダス文明像が生み出されていたことがわかる。このことはインダス文明研究史を考える場合重要である。

その後、インドとパキスタンは 1947 年に分離独立をとげる。インドではインド考古局が中心となって、一方パキスタンでは外国隊が中心になって発掘が進む。そしてほぼ 20 年たった後の分布図 (Wheeler 1968: 4) と遺跡名 (Wheeler 1968: 138-140) が以下の通りである。

1. アフマドワラー遺跡 (Ahmadwālā) バハーワルプル (未発表)
2. アリー・ムラード遺跡 (Ali Murād) シンド (Majumdar 1934: 89-91)
3. アッラフディーノ遺跡 (Allahdino) シンド (未発表)

4. アムリー遺跡 (Amri) シンド (Majumdar 1934: 24-28)
5. バーラー・コート遺跡 (Bala Kot) シンド (Raikes 1963: 657)
6. チャップワーラー遺跡 (Chabbuwālā) バハールワルプル (未発表)
7. チャク・プールバーネ・シャール遺跡 (Chak Pūrbāne Syāl) サーヒーワル (Vats 1940: 475-76)
8. チャヌフ・ダロ遺跡 (Chanhū-daro) シンド (Majumdar 1934: 35-38; Mackay 1943)
9. チャライーワーラー遺跡 (Charaīwālā) バハールワルプル (未発表)
10. ダーバルコート遺跡 (Dābarkot) バローチスターン (Stein 1929: 55-64)
11. ダイワーラー遺跡 (Daiwālā) バハールワルプル (未発表)
12. ダンブ・ブーティ遺跡 (Damb Buthi) シンド (Majumdar 1934: 114-120)
13. デラーワル遺跡 (Derāwar) バハールワルプル (未発表)
14. ダル遺跡 (Dhal) シンド (Majumdar 1934: 125-27)
15. デイジ・ジ・タークヴィ遺跡 (Deji-Ji-Tākvi) シンド (Vats 1935-6: 36-7)
16. エディト・シャハル遺跡 (Edith Shahr) バローチスターン
17. ガラクワーリー遺跡 (Garakwālī) バハールワルプル (未発表)
18. ガージ・シャー遺跡 (Ghāzi Shāh) シンド (Majumdar 1934: 79-86)
19. ゴランディ遺跡 (Gorandi) シンド (Majumdar 1934: 88)
20. ハラッパー遺跡 (Harappā) パンジャーブ (Vats 1940)
21. ジャルハル遺跡 (Jalhar) バハールワルプル (未発表)
22. ジュデイルジョ・ダロ遺跡 (Judeirjo-daro) シンド (Wheeler 1959: 98)
23. カーリーバンガン遺跡 (Kalibangan) ラージャスターン (Lal 1962: 454-457)
24. カルチャト遺跡 (Karchat) シンド (Majumdar 1934: 129-131)
25. カンプリー・タール遺跡 (Khānpurī Thār) バハールワルプル (未発表)
26. コタースル遺跡 (Kotāsūr) シンド (Vats 1935-6: 37-8)
27. コート・デイジー遺跡 (Kot Diji) シンド F.A. Khan (1965)
28. コートラー・ニハング・カーン遺跡 (Kotlā Nihang Khān) パンジャーブ (Vats 1940: 476-477)
29. クドワーラー遺跡 (Kudwālā) バハールワルプル (未発表)
30. ローフリー遺跡 (Lohri) シンド (Majumdar 1934: 65-67, 73-76)
31. ロフムジョ・ダロ遺跡 (Lohumjo-daro) シンド (Majumdar 1934: 48-58)
32. メーヒー遺跡 (Mehī) パンジャーブ (Stein 1931: 154-163)
33. ミタ・デヘノ遺跡 (Mitha Dehenno) シンド (未発表)
34. モヘンジョ・ダロ遺跡 (Mohenjo-daro) シンド (Marshall 1931; Mackay 1938)
35. ノクジョ・シャーディーンザイ遺跡 (Nokjo-Shāhdīnzai) パンジャーブ (Stein 1942: 152-153)
36. パンディ・ワーヒ遺跡 (Pāndi-Wāhī) シンド (Majumdar 1934: 91-95, 10-114)
37. ルーパル遺跡 (Rupar) パンジャーブ (IAR 1954-55: 9-11)
38. サンダナワーラー遺跡 (Sandhanāwālā) バハールワルプル (Stein 1942)
39. シャージョ・コティロ遺跡 (Shāhjo Kotiro) シンド (Majumdar 1934: 137-139)
40. シクリ遺跡 (Shikhri) バハールワルプル (未発表)
41. ソトカー・コー遺跡 (Sotka Koh) マクラーン
42. ソトカーゲン・ドール遺跡 (Sutkāgen-dor) マクラーン (Stein 1931: 66; Stein 1937: 70-71)
43. ターノ・ブリ・カーン遺跡 (Thāno Buli Khān) シンド (Majumdar 1934: 142)

44. トレコアー・タール遺跡 (Trekoā Thār) バハーワルプル

45-65 (?) ゴーシュの指導の下、インド考古局が 1950-51 年に、約 20 遺跡を確認している。その遺跡はラージャスターン州のビーカネル地方の北部、ガッガル川（あるいはサラスヴァティー川）沿いにある。（長田注：遺跡名としてあげられているのは、すでに 23 で言及されているカーリーバンガンとタルカーネーワラー・デーラーだけである）

66-100 (?) 最近約 40 ほどの遺跡がインダス川河口からキャンベイ湾にかけての間にあることが報告されている。（長田注：遺跡としてあげられているのはアムラ、バーガトラウ、ラーカーバーワル、ロータル、メーガム、ラングプル、ロージディ、ソームナート、テロードの 9 遺跡である）

最後に、追加として、アールムギールプルをあげている。

（以上が「一覧表」）

この遺跡一覧表はずいぶんといいかげんである。大まかに一括りにされた 45-65 と 66-100 の記述では、(?) まで付され、遺跡名が挙げられていない。いずれも独立後のインドで発見されたもので、独立後に発掘された遺跡にはあまり興味がないようにすらみえる。つまり、これら 2 つの遺跡一覧表から言えることは、独自の解釈を前面に出したウィーラーのインダス文明観というものが限られた遺跡だけを考慮して打ち立てられたものであるということである。しかも、独立後に数々の遺跡が発掘されているにもかかわらず、(?) をつけた状態で、権威あるケンブリッジのインド史シリーズの一冊として刊行され続けたのである。そして、その解釈が 21 世紀を迎えた現在でも、流布しているのだから、恐ろしいものである。これでは、インダス文明がインダス川流域中心史観となっても、モヘンジョ＝ダロ、ハラッパー中心主義となっても致し方ない。そう痛感させられるのは私一人ではないであろう。

ウィーラーは晩年にはほとんど新しい遺跡に関心を寄せてなかったようだが、そんななかで、独立後の両国において、インダス文明関連遺跡を多く見つけた人たちがいる。それが、インドでは J.P. ジョーシーを中心とするインド考古学局の分布調査 (Exploration) であり、パキスタンではムガルによるチョーリスターンでの遺跡探索である。前者がドーラヴィーラー遺跡を発見報告し、後者はガンウェリワラー遺跡を発見している。

そのジョーシーらがインドにおけるインダス文明関連遺跡（ここには pre-Harappa, Harappa, Late Harappa の 3 つにわけている）を一覧表にした 1984 年の論文がある (Joshi, Bala and Ram 1984)。皮肉にも、この論文はインダス文明遺跡の数を熱心に追っていないようにみえるウィーラーへの献呈記念論文集のなかに収められている。その論文にあげられているのは 1023 にものぼる遺跡数である。もっともこの中にはインダス文明を代表するハラッパー文化とは異なるガネーシュワール文化の遺跡も含まれるため、若干少なく見積もらなくてはならないが、それでもインドだけでこの数に達すのだから、いかにインダス文明関連遺跡が増えたのかわかる。また、われわれが出版している Occasional Paper でも、2 巻でグジャラート州の遺跡が取り上げられているが、グジャラート州だけでもその数は 555 にのぼる。

インダス文明関連遺跡をどのように定義するか。それ自体が大きな問題である。しかし、その定義はともかくとして、確実に新しい遺跡が報告されていることだけはまちがいない。しかし、その新しい遺跡を組み込んだインダス文明像の構築にはまだまだ時間がかかりそうである。われわれのプロジェクトがその一翼を担うことができればこの上ない喜びである。それをめざ

して、これまでの報告書を読み込みまとめるという地道な活動が重要である。その一歩として、報告書総覧が重要な意味を持つことは明白である。

5 まとめ

小論はインダス文明関連遺跡発掘報告書総覧の序論として書き始めたものである。しかし、筆者の手元にはパキスタンでの発掘情報を知る手がかりとなる *Pakistan Archaeology* などの雑誌がなく、思ったようには遺跡発見、遺跡発掘の歴史をうまく跡づけることができないことに気がついた。さいわい、南アジア考古学を専門とする上杉彰紀が赴任してきたため、彼に総覧のシリーズはお任せすることにして、小論はこのシリーズの意義や発掘・発見史の概要を述べるにとどまった。そのため、内容が尻切れトンボの印象をぬぐえない。

ただ、つぎのことだけはこの機会にぜひ強調しておきたい。発掘・発見史でいえることは、ウィーラーが『インダス文明（第3版）』を出版してから、発見された遺跡の数が飛躍的に伸びたこと、その割には発掘された数がまだまだ少ないこと、この2点をいつも念頭におきながら、インダス文明を考えてほしいということである。

いま、われわれのプロジェクトでは *Occasional Paper* をまとめている。そのなかで、カラクワールの大学の学生たちによるカッチ県のインダス文明遺跡一覧（第2巻）やマッラーによるシンド州の新たな遺跡紹介（第3巻）などをみると、まだまだ新しい遺跡があることが明らかにされてきている。ポセールがかなり網羅的に紹介を試みたが、それでもインダス文明関連遺跡の実態をつかみきれたとはいえない。

このインダス・プロジェクトはあと3年半ばかりになった。まだまだ発掘されていない遺跡を眼前にして、どの遺跡の発掘を優先順位上位におくのか、またすでに発掘された遺跡のデータが眠っているなか、こうしたデータをどうすれば記録化できるのか、まだまだ問題は山積している。

インダス・プロジェクト以降も、常時インダス文明関連遺跡の発掘を日本がリードしていけるようになるまで、われわれのプロジェクトはけっして終わらない。そんな決意を持って、小論を締めくくことにする。

【引用・参考文献】

- Chakrabarti, Dilip K. (1988) *A History of Indian Archaeology from the Beginning to 1947*. Munshiram Manoharlal, New Delhi.
- Chakrabarti, Dilip K. (1997) *Colonial Indology: Sociopolitics of the Ancient Indian Past*. Munshiram Manoharlal, Delhi.
- Chakrabarti, Dilip K. (2003) *Archaeology in the Third World: A History of Indian Archaeology since 1947*. D.K. Printworld, Delhi.
- Joshi, Jagat Pati (1990) *Excavation at Surkotada 1971-72 and Exploration in Kutch*. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Joshi, Jagat Pati, M. Bala and Ram (1984) "The Indus Civilization: a reconsideration on the basis of distribution maps", in B.B. Lal and S.P. Gupta (eds.) *Frontiers of the Indus Civilization*. Books & Books, Delhi. pp. 511-530.
- Khan, F. A. (1965) Excavations at Kot Diji. *Pakistan Archaeology* 2: 11-85.
- Lahiri, Nayanjot (2005) *Finding Forgotten Cities: How the Indus civilization was discovered*. New Delhi: Permanent Black.
- Lal, B.B. (1962) Kalibangan. *Illustrated London News* 24 March.

- Lal, B.B. (1964) *Indian Archaeology since Independence*. Motilal Banarsidass, Delhi.
- Lal, B.B.; B.K. Thapar; J.P. Joshi and M. Bala (2003) *Excavations at Kalibangan: The Early Harappan (1960-69)*. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Mackay, Ernest J.H. (1938) *Further Excavations at Mohenjo-daro*. Government of India, Delhi.
- Mackay, Ernest J.H. (1943) *Chanhu-daro Excavations, 1935-36*. American Oriental Society, New Haven.
- Majumdar, N.C. (1934) *Explorations in Sind*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 48. Delhi.
- Mallah, Qasid H. (2008) Recent archaeological discoveries in Sindh, Pakistan. *Occasional Paper: Linguistics, Archaeology and Human Past* 3: 27-76.
- Marshall, John (1924) "First light on a long-forgotten civilization", *Illustrated London News* 20 September 1924:528-532, 548.
- Marshall, John (1931) *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. 3 Volumes. Arthur Probsthain, London.
- McCown, Donald (1947) Distributions of Harappā pottery. *Ancient India* 3:129-130.
- Mughal, M. Rafique (1997) *Ancient Cholistan: Archaeology and Architecture*. Ferozsons, Lahore.
- Possehl, Gregory L. (1999) *Indus Age: The Beginnings*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia.
- Possehl, Gregory L. (2002) "Archaeology of the Harappan Civilization: An Annotated List of Excavations and Surveys", in S. Settar and Ravi Korisetar (eds.) *Indian Archaeology in Retrospect 2: Protohistory, Archaeology of the Harappan Civilization*. Manohar, New Delhi. pp. 421-482.
- Possehl, Gregory L. (2003) *The Indus Civilization: A Contemporary Perspectives*. Alta Mira, Walnut Creek.
- Raikes, Robert L. (1963) The end of the ancient cities of the Indus civilization in Sind and Balutistan. *American Anthropology* 65(3):655-659.
- Roy, Sourindranath (1961) *The Story of Indian Archaeology 1784-1947*. Archaeological Survey of India, New Delhi.
- Seth, Hansmukh, L.C. Patel and Bhimraj Varhat (2007) Harappan sites in Gujarat. *Occasional Paper: Linguistics, Archaeology and Human Past* 2: 77-110.
- Singh, U. (2004) *The Discovery of Ancient India: Early Archaeologists and the Beginnings of Archaeology*. New Permanent Black, Delhi.
- Stein, M. Aurel (1929) *An Archaeological Tour in Waziristan and Northern Baluchistan*. Archaeological Survey of India, Calcutta.
- Stein, M. Aurel (1931) *An Archaeological Tour in Gedrosia*. Archaeological Survey of India, Calcutta.
- Stein, M. Aurel (1937) *Archaeological Reconnaissances in North-Western India and South-Eastern Iran*. London.
- Stein, M. Aurel (1942) A survey of ancient sites along the 'lost' Sarasvati River. *Geographical Journal* 99: 173-182.
- Vats, M. S. (1940) *Excavations at Harappa*. 2 volumes. Government of India, Delhi.
- Wheeler, Mortimer (1959) *Early India and Pakistan to Asoka*. London.
- Wheeler, Mortimer (1968) *The Indus Civilization*. third edition. Cambridge University Press, Cambridge.